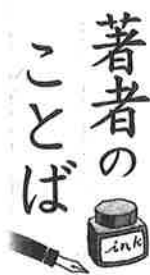




今年、外務省が1869（明治2）年に設置されてから150年にあたる。対外関係を担ってきた人物に焦点を当てながら、激動の日本外交を振り返った。「今までにない、できるだけ新しい研究成果を反映した通史を目指しました」アジア歴史資料センター長や、外務省の「日本外交文書」編集委員長を務める筑波大名誉教授。設置から100年の1969（昭和44）年には国際政治学者の細谷千博らが中心となり、機構の変遷や人事、重要外交問題の概要を描いた大部

## 国際環境に適応目指す

の「外務省の百年」（上下2巻）が分担執筆された。150年の今回は、一般社団法人・日本外交協会に委託された著者が、1853（嘉永6）年のペリー、プチャーチン来日から今年2月の米朝首脳会談に至る外交の軌跡を、全て一人で書き上げた。内外から集めた外交文書の写真や図版約300点を添え、コラムも多用して一般向けの面白い読み物に仕上がっている。「最初は、幕末・維新の最新の研究に学ぶところから始めました。欧米に抗し



### ■日本外交の150年 ——幕末・維新から平成まで

はたのすみお  
波多野 澄雄さん



きれずに開国したと捉えられがちですが、実際は戦争をせず自立を守ったと言えます。粘り強く開国の有利な条件を探ったのです」幕末外交の担い手だった外国奉行、岩瀬忠震や川路聖謨らの横顔が、コラムに要領よく紹介されている。明治から平成の時代までを貫く日本の外交官の行動様式はあるのだろうか。「国際環境を大國同士の競争的なものと見て、日本もそこに参加し、自国の地位を上げようとするところ

は一貫しています。国際的なルールを作ったり、外交戦略を持って世界をリードしたりするのはなく、環境に適応する道をとってきました。何が望ましいかわり、何が可能かを追求する外交と言えるでしょう」

そして大正期の外交官、石井菊次郎が日本の外交官に求められる資質として挙げた「誠実と穩健」を引用した上で、こう指摘した。「誠実と穩健は信頼を築く重要な資質ですが、それだけでは乗り切れない場面も増えてきます。中国、朝鮮半島とは、真の友人関係を作れませんでした。戦争と植民地支配の障害を克服する英知が求められます」

文・岸俊光  
写真・丸山博  
日本外交協会・4104円